

突然訪れる介護、 迫る医療の選択。 あなたは、家族は、 準備できていますか？

介護と医療が必要になったそのとき、住み慣れた地域で「自分らしい」暮らしを続けるという選択肢があります。皆さんは、いざというときの備えはできていますか？

ここでは、突然の体調不良をきっかけに、在宅医療を受けながら通所介護サービスを利用している鈴木照意さん(93)とその家族を紹介します。

突然の体調不良…そのとき家族は

「やっぱり家はいいな」。自宅で療養中の照意さんが話してくれた、印象的な一言です。

昨年11月、これまで病気をしたことがなかったという照意さんを襲った突然の体調不良。そして、93年の人生で初めての療養生活。高齢とはいえ、本人にとっても家族にとっても、まさかの出来事でした。

体調を崩してからは、食事がまったくできず、立つことすらもままならない日々が続きました。それでも「このまま入院してはどんどん弱ってしまう」と感じた家族は、地域包括支援センターに相談し、在宅医療を選択します。

照意さんは自宅で、毎日のように先生や看護師の訪問を受けました。家族の希望は「ご飯が食べられるようになること」。治療方針が決まりました。先生も家族の意思を尊重し、食事ができるようにするために、薬を調整してくれたそうです。

周囲の懸命なサポートにより、照意さんの体調も徐々に回復。食事がのどを通り、杖を使って歩けるようにもなりましたが、まだ周囲のサポートは欠かせません。そのため昨年12月からは、家族の負担も考慮し、週2回デイサービスに通っています。

在宅医療は患者さんが主役

診療所を立ち上げて丸6年が経過し、現在は市内外の患者さん約380人を担当しています。入所施設への訪問もしているので、1日の訪問件数は8~10件くらいでしょうか。

私が思う在宅医療の特徴は「患者さんが主役」というところです。入院した場合、病院の都合に合わせないといけません。在宅医療なら住み慣れた自宅で家族とともに過ごしながら、患者さんのペースに合わせた診察を受けられますから。

この仕事を始めてから、辛い経験もたくさんしてきました。今でも「こうしてあげられれば」「あのとき訪問しておけば」と反省することばかりです。それでも、私たちを必要としている患者さんは数多くいます。その人たちの声に応えられるよう、これからも頑張ります。



那須訪問診療所
菊地 章弘 先生



1 家族と談笑中の1コマ。シノで作った立派なザルは、照意さんのお手製 **2** 3月に一度の訪問診療。当初は、点滴やレントゲンも在宅で行っていました **4** デイサービスでの照意さん。無理のない範囲で体を動かしています **5** 照意さんの「生きがい」と話してくれた農作業。またできるようになるのが、今の目標です



す。照意さんは、「また歩けるようになったときはうれしかったね。畑が『生きがい』だから。暖かくなればまたできるようになるんじゃないかな。希望は持ってるんだ」と、今の心境を語ってくれました。

在宅医療は理想の環境

「誰でも理想は自分の住み慣れた環境で療養したいと思ってるんじゃないですか。それには家族の理解が必要。私たち家族は、できる限りサポートしたいなと思っていました」と話すのは、照意さんの娘婿・正義さん。本音で言い合える家族関係ができてからこそ、「自分らしい暮らしが続けられる」と語ってくれました。

介護や医療が必要になる場面は、いつでも、誰にでも、訪れる可能性があります。「自宅で介護ができるのか」と、不安に思う人もいますでしょう。現在は入浴やリハビリなどの介護サービスがあり、介護の負担を軽減できます。「在宅医療を希望、でも不安：」。そんなときは、地域包括支援センターや☒高齡福祉課に相談してみてください。本人にとっても、介護する人にとっても、より良い選択肢を一緒に考えましょう。

何かあったとしても安心



照意さん家族
鈴木 正義さん(娘婿)
杉田 見知子さん(孫)

当時、家族としては、新型コロナウイルス感染症の不安と、その影響でお見舞いにも行けないことから入院はさせたくないと考えていました。毎日通院させるのも困難な状態でした。そこで、地域包括支援センターに相談したところ、在宅医療という選択肢を知りました。入院も通院も難しい状況だったので、「これだ!」と思いましたね。

在宅医療を始めてすぐは、毎日のように先生や看護師さんが訪問してくれて、とても助かりました。何かあったときにはすぐに先生が来てくれるという安心感がありますし、自宅で過ごせるということは、本人はもちろん、家族にとっても常に見守られているのでホッとしますよね。私たちにとって在宅医療は、とても良い選択だったと感じています。